九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Kazakhstan's Multi-Vector Diplomacy : The Making and Development of the Soft Balancing Policy of Kazakhstan vis-?-vis Russia

ヌルガリエヴァ, リャイリャ

https://hdl.handle.net/2324/1928613

出版情報：九州大学, 2017, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

（様式６－２）

氏　　名	ヌルガリエヴァ　リャイリャ
論　文　名	Kazakhstan's Multi-Vector Diplomacy: The Making and Development of the Soft Balancing Policy of Kazakhstan vis-à-vis Russia（カザフスタンのマルチ・ベクトル外交：カザフスタンによる対ロシア・ソフトバランシング政策の形成と展開）
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　松井　康浩 副　査　九州大学　教授　大河原　伸夫 副　査　九州大学　准教授　Hall Andrew 副　査　九州大学　特任研究員　八谷　まち子 副　査　広島市立大学　教授　湯浅　剛

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

本論文は、ソ連崩壊の渦中から誕生した新興国家カザフスタンが現在に至るまで展開しているマルチ・ベクトル外交を考察したものである。同国のマルチ・ベクトル外交については、少なくない先行研究がすでにその成果を発表しているが、本論文はその成果をさらに掘り下げ、カザフスタンが歴史的に深く結びついてきたロシアからの経済的な自立を図ることを狙いとした対外政策であると捉え、かつ、ソフトバランシングという国際関係論の分野における新規の概念を援用して、その分析を試みたところに本論文のユニークかつ最大の特徴がある。

ソフトバランシングとは、突出したパワーを有した冷戦直後のアメリカ合衆国に対する他の大国の対外行動を分析するために案出された概念で、要は、軍事的に対抗することが困難な状況で、それ以外の様々な方法、たとえば、地域的国際機構の創設、地域的な経済協力枠組みを通じた連携、多角的な二国間外交の展開など多様な手法を用いて一定のバランスを図る試みを表現するものある。カザフスタンにとって、隣国ロシアは安全保障上きわめて重要な国であることは言うまでもなく、それに対抗することはほぼ不可能である。それでも、国内に多くのロシア人人口を抱えるカザフスタンが、ロシアの影響力に飲み込まれることなく、独立した国家として生きるために、ロシアからの経済的な自立を図ろうとして、地域国際機構への参加や複数の二国間経済協力関係の構築等を模索し、ソフトバランシング政策を様々に採用していることを本論文は考察している。

まず序章では、制度的バランシングと非制度的バランシングに分類する近年のソフトバランシング論に基づいて、国際制度と二国間関係の双方を本稿の対象にすることを強調しながら、先行研究との関係で本論文の課題を明示している。続く第１章では、カザフスタンの一連の外交コンセプトを検討し、かつそのコンセプトの下での政策をフォローすることを通じて、マルチ・ベクトル外交の形成・展開のプロセスを整理している。と同時に、カザフスタン・ロシア関係の歴史を概観し、マルチ・ベクトル外交がロシアを強く意識した対外政策であることを論証している。第 2 章では、石油・天然ガス開発・輸出をめぐってカザフスタンとロシアの利害が衝突する側面に光が当てられる。イランやトルコ等が組織した「経済協力機構（ECO）」への加盟とそれが進めたロシアを経由しないパイプライン建設、あるいは、ロシアを制度内に取り込むための「ユーラシア同盟構想」とその後の展開等に着目しながら、国際制度を媒介とした対ロシア・ソフトバランシング政策がカザ

フスタンの利益に貢献しなかった点に力点が置かれている。

第 3 章～第 5 章は、第 2 章の議論を踏まえつつ、非制度的なソフトバランシング政策を取り上げ、とりわけ、資源開発や輸出を通じた経済発展という面でカザフスタンの利益増進につながった複数の二国間関係を取り上げている。まず第 3 章では、カザフ・中国間の深まる経済関係を、中国に直結するパイプライン建設、中国による資源分野にとどまらない多角的な投資の実態等の検討を通じて明らかにし、続く第 4 章では、カザフスタンにとって、ヨーロッパ諸国内で最大の交易相手国であるイタリアとの二国間関係を取り上げ、油田開発分野でのイタリア企業の投資に特に光を当てながら、イタリアが EU とカザフスタンの結びつきや技術開発に貢献するキープレイヤとなっていることを主張する。カザフ・日本間の「戦略的協力」関係を取り上げた第 5 章では、日本の高い技術に期待を寄せるカザフスタンとウランやレアメタルに関心をもつ日本の利害が一致する中で、ODA の供与に始まった両国関係が経済協力を深化させた様相を浮き彫りにしている。全体として本論文は、カザフスタンのマルチ・ベクトル外交に対し、これまでのところ概ね成功裏に進展してきたとの高い評価を与えている。

以上のように本論文は、ソフトバランシング概念を採用することを通じて、国際制度と複数の二国関係を組み合わせたカザフスタンによるマルチ・ベクトル外交を多角的に検討し、カザフの対ロシア政策を再考した点で先行研究とは異なる独自性を示しており、そこに、本論文の学術的意義が認められる。そのため、論文調査委員会は、全員一致で、本論文を博士（比較社会文化）の学位に値するものと評価した。